

クウェート政府奨学金

2006年—2007年度留学生

「異文化」と付き合いおう！

大阪大学外国語学部比較文化専攻 畑中宏一

プロローグ

こんな日が来るなんて想像もしていなかった。2006年9月、二十歳の男はなぜか砂漠の国の空港に降り立っていた。

その年の6月。イラン好きの経済学部の友人U君のアパートに泊らせてもらっていた時のこと。呑み終わると彼は「クウェート政府奨学金留学」の応募用紙を見せてくれ、こう言った。「ペルシア語の次はアラビア語をやりたい。畑中君も一緒に応募してみたら？」

…もしもあの夜さえなければ、予定外の人生を送ることもなかったであろう。結局U君は応募せず、僕の留学中に大手商社への就職を決めた。これからはビジネスで中東と関わっていくのだそうだ。一方僕の方はというと、一年の留学期間を終え、ようやく腰を落ち着けてこの回想録を書かせて頂いているというノンビリぶりである。書きたいことは山盛りだが、ここでは僕の生活基盤であった寮生活のことを中心に振り返りたい。

初めての寮生活

これまでずっと親のスネを齧らせてもらってきた僕は、クウェート大学の男子寮での生活を始めることになった。とはいうものの、生活コストゼロ、学校まで徒歩5分、さらに一日3食付きと、この上なく甘くとろける環境だった。そんな中で、寮の食堂にてインドやバングラデシュの料理人が作ってくれる油っこい食事を毎日食べ続けた結果、日本帰国時には晴れてメタボリック予備軍に入隊することができた。一日も早く名誉除隊することが、目下一番の使命である。

僕たち語学留学生の生活はというと、クウェート大学付属の語学センターにて週5日、朝の9時から12時までアラビア語を勉強、あとは自由時間という夢のようなものであった！ 最初の頃はルームメイトである日本人の加藤さんとひたすら部屋で喋っていた(この年から今まで3人だった日本人留学生枠が5人に増え、初年は男2人:女3人だった)。喋るネタがなくなると、今度は12月に開かれる日本人会の忘年会に向けて、漫才をやろうということになった。奇しくも大阪出身の僕と、能登半島の荒波に揉まれて育った加藤さん(当時京都の大学生)

は、大のお笑い好きでもあったのだ。

2人は「はたなかとう」というセンス抜群のコンビ名を一瞬にして決め、忘年会まで男子寮の屋上で練習した。今から考えると、砂漠とペルシャ湾を見渡せるその場所で、「どうも、はたなかとうで〜す」「もうええわ」などと大声で連呼していたことがクウェートでの最初の思い出だと思うと、「なんでやねん！」と突っ込みたくなる(果たして後日忘年会にて疲労、もとい披露した漫才は、無事なんとか成功に終わった)。

新しいルームメイト

さてクウェート生活も約一ヶ月が過ぎた頃、加藤さんと相談の上、寮父さんに頼んでルームメイトをチェンジしてもらうことにした。決して漫才の不出来によるストレスが原因ではなく、日本語を極力使わないようにしたいという共通の希望によるものであった。僕はすでに親しくなっていたセネガル・ダカール大学出身のアブドルカーデル君と同じ部屋にしてもらう。加藤さんの方は、タバコ兼ブラックコーヒー友の会を結んだダンディーなトルコ人と同部屋になり、それぞれ国際交流・語学力向上に励むこととなった。

僕と新しい相棒アブドルカーデルは同い年。彼はセネガル人の父とモーリタニア人の母を持ち、両方の国で生まれ育った。そのためアラビア語、フランス語をはじめ数ヶ国語がペラペラ。唯一の救いは彼の勉強不足のおかげで(失礼!)英語がつかなく、どうしてもアラビア語で話さないといけない状況が毎日続いたことである。

そんなこんなで「起きる」に始まり「寝る」に至る基本的な日常単語から、果ては「異性へのアプローチに使える単語」といった全く持って戒律の厳しいクウェートでは使えそうもない単語を、彼は面倒くさげらず親切に教えてくれた。その上、アフリカ訛りのフランス語も習うというおまけ付き。フランス語は美しいという定説は、美しいフランス女性が話す時にのみ当てはまるのだという事実を発見した。

アブドルカーデルはイスラーム教徒。毎朝6時ごろに起床して礼拝を行なう。そんな光景をベッドで目をこすりながら見ていた僕は、「あー、イスラームの土地にいるんだなあ」と実感したものである。礼拝時には崇高に見える彼も、素顔はヒップホップやファッション好きの普通の大学生。早くに父を亡くしている彼は、モーリタニアにいる母と婚約者のことをいつも気にかけて、しばしば故郷に電話していた。たまにしか家族にメールしていなかった己の態度をバシバシ恥じたのは言うまでもない。

男子寮の仲間たち

一応大学生である僕たちは、時にはマジメな話題に熱中することもあった。特に隣の部屋に住むポーランド人とベナン人、そして僕とアブドルカーデルの4人で、夜な夜な宗教や政治談議に花を咲かせることが幾度となくあった。(もともと、花を咲かせる華やかさはみな持ち合わせておらず、盆栽のような地味な話し合いではあったが)。それぞれ肌の色も宗教も文化も異なるが、そんなことは話しているうちに気にしなくなる。違って当たり前、

自らを「異化」してあるがまます受け入れる。大事なのは自分がどこの国の出身かということよりも、どんな人物でどんな考えを持っているか、ということなのである。

のちに一人一部屋という寮則の変更により、アブドゥルカーデルとの相部屋暮らしにさよならを告げることになったが、国際性豊かな寮生活に飽きることはなかった。男子寮にはイスラーム世界を中心に世界約 60 カ国からの留学生がおり、寮の共通語は正則アラビア語(フスハー)であった。マレーシア人もボスニア人もソマリア人もみな美しいフスハーで話す。アラビア語をご存知の方ならお分かりだと思うが、これはアラビア語学習者にとって理想的な環境である。

未知の国からの学生たちと暮らす毎日は、小さい頃から多種多様な文化に興味のあった僕にとって、ポジティブな刺激の強すぎるものであった。アフガニスタンやパキスタンの学生には信仰心の篤い者が多く、イスラームについて多くの知識を教えてくれた。台湾の学生には僕よりも日本ドラマに詳しい者もあり、我が国芸能事情の「逆輸入」を受けた。インド人学生と英語で話し込んだあとには、'department'の発音が「デパルティメント」になってしまった。

また男子寮では数多くの言語が飛び交っており、舌を巻こうにもその数が足りなかった。例えば、アゼルバイジャン人とタジキスタン人がロシア語で意思疎通。スイス人とニジェール人がフランス語で意思疎通。ギニアビサウ人とモザンビーク人がポルトガル語で意思疎通。アラビア語と格闘していた日本人がちよっと偏頭痛、などである。幼少期をミラノで過ごし大学でも伊語を学んでいた僕は、イタリア語を操るアルバニア人と言語が由縁で仲良くなった。異文化と付き合うために一番大切なのは「気持ち」だと思うが、やはりコミュニケーション手段としての「言葉」も同じくらい大事なようだ。

エピローグ

そんなこんなで、僕にとって男子寮での生活は、さまざまな文化に出会い、さまざまな人の価値観に触れ、自身自身の視野を何百倍にも押し広げる、まさに果汁 100%のミックスジュース級に濃密な 11 ヶ月間であった。

一方で寮に閉じこもっては肝心のクウェート社会がわからない。幸い仲の良いクウェーティーの友達が何人かでき、彼らとはよく一緒に出掛け、生のクウェート事情を聞いたりした。また博物館や文化遺産など積極的にクウェートカルチャーを学びに足を運んだ。長期休暇中には格安航空を用いてオマーン、シリアなど中東諸国を 7、8 カ国旅行。机上の「座学」よりも、経験の「実学」から本当にたくさんのことを吸収した留学であった。

ミミズが盆踊りしたようなアラビア文字から始めた僕のアラビア語は、一年後には未熟ながらも通訳のお手伝いをさせて頂けるまでになった。そんな価値ある機会を提供して頂いたクウェート政府、常にお世話になりっぱなしだった日本大使館の方々、飽きることなく教えて下さった語学センターの先生方、そして何より個性あふれる寮仲間たちに心から感謝の意を表したい。これからはその恩返しとして、日本とクウェートを含むアラブ諸国の関

係発展に貢献できればと、心の隅の方で思っている。シュクラン・ジャズイーラン！（ありがとうございました！）